

金沢 21 世紀美術館 栗津潔追悼「映画タイトル・デザイン上映」ならびに 栗津美穂講演会 の開催について(お知らせ)

金沢 21 世紀美術館開館 5 周年記念展「愛についての 100 の物語」の出品作家であり、約 3,000 点にのぼる作品を当館が所蔵するコレクション作家である栗津潔氏が、去る 4 月 28 日に 80 歳でご逝去されました。当館では、栗津潔氏の偉業を追悼し、「愛についての 100 の物語」会期中（～8 月 30 日）、栗津潔の映画タイトルデザインの特別上映を、下記のとおり行いますので、お知らせします。

また、6 月 14 日（日）には、栗津潔氏の長女で、児童保護ソーシャルワーカーとしてアメリカでご活躍の栗津美穂氏をお招きし、講演「豊かな国の貧困を生きる子どもたち」を展覧会プログラムとして開催しますので、あわせてお知らせいたします。

告知案内広報へのご協力を賜りますようお願いいたします。また、栗津美穂氏への取材申し込みも承ります。

記

■ 栗津潔追悼 映画タイトル・デザイン上映プログラム

期間：6 月 10 日(水)～8 月 30 日(日)(予定)

(展覧会開催時間中、休館日は除く。上映時間詳細はホームページでご案内します。)

場所：金沢 21 世紀美術館レクチャーホール

特別協力：財団法人草月会

料金：無料

内容：金沢 21 世紀美術館では開館 5 周年記念「愛についての 100 の物語」の出品作品として、栗津潔氏の《ピアノ炎上》(1974 年、16mm フィルムの DVD 変換、8 分 30 秒)を、他の 2 作家(山下洋輔、詫間のり子)の記録映像とともに館内レクチャーホールにてループ上映してまいりました。

このたびの栗津潔氏のご逝去に哀悼の意を示し、氏の代表的な映画タイトル・デザイン、以下の 6 点を《ピアノ炎上》に加えて追悼特別プログラムとし、同展覧会期中(8 月 30 日まで)上映します。

邦題	英語タイトル	制作年	監督/他
ホゼー・トレス	Jose Torres	1959	監督：勅使河原宏 ◎草月会
落とし穴	The Pitfall	1962	監督：勅使河原宏 脚本：安部公房 ◎草月会
「落とし穴」予告編	The Pitfall: Trailer		
砂の女	Woman in the Dunes	1964	監督：勅使河原宏 脚本：安部公房 ◎草月会
他人の顔	The Face of Another	1966	監督：勅使河原宏 脚本：安部公房 ◎草月会
サマー・ソルジャー	Experimental Film Works	1972	監督：勅使河原宏 脚本・共同監督：ジョン・ネースマン ◎草月会

■ 栗津美穂 講演

「豊かな国の貧困を生きる子どもたち：アメリカ児童保護ソーシャルワークの現場から」

日時：6 月 14 日（日）14：00～15：30

場所：金沢 21 世紀美術館レクチャーホール

料金：無料

講師：栗津美穂

コメンテーター：山野良一（神奈川県厚木児童相談所児童福祉司）

コーディネーター：箱崎幸恵（オレンジリボンネット管理人、母子自立支援員兼婦人相談員）

内容：父、栗津潔の生い立ちと芸術家としての生き方、金沢 21 世紀美術館とのかかわり、そして、子どもにとっても大人にとっても、「好奇心」と「創造する力」が「生きる力」につながっていくことに触れながら、アメリカの最新の研究「子どものレジリエンス（弾力、弾性、回復力）」について、実際のソーシャルワークの現場経験を通じてお話いただきます。

■ 展覧会「愛についての 100 の物語」で展示中の栗津潔、栗津美穂作品

- ◎ 栗津潔 実験映像《ピアノ炎上》（上映場所：レクチャーホール）
- ◎ 栗津潔 彫刻《H₂O アースマン》（展示場所：レクチャーホールと光庭）
- ◎ 栗津美穂 書籍《ディープ・ブルー》（展示ゾーン 2 内、栗津潔愛用の椅子の上に展示）

別途、栗津美穂氏へのインタビュー取材を希望されるかたはご相談ください。

※備考

＜作家プロフィール＞

栗津潔（あわづ きよし／AWAZU Kiyoshi）

1929年東京都生まれ、2009年4月28日川崎市にて死去。

絵画・デザインを独学で学ぶ。ポスター作品《海を返せ》で1955年日本宣伝美術会展・日宣美賞受賞。戦後日本のグラフィック・デザインを牽引し、礎を築いた。表現領域は、絵画・彫刻・写真・映像・演劇・パフォーマンス・音楽・文学・建築などジャンルを超え、近年その表現活動の先見性とトータリティが再評価されている。1980年代以降、鋭い批評眼を人間の生の危うさに向け、「21世紀を生きる神童」として《H₂Oアースマン》と名づけたキャラクターを創出。生きとし生けるものの総体のなかで人間の存在を問い続けた。金沢21世紀美術館は、2006年から2008年にかけて、栗津デザイン室（代表、栗津ケン）より栗津潔アトリエ所蔵の作品の寄贈を受け、現在、所蔵作品は約3000点にのぼり、栗津潔のほぼ全仕事を網羅するコレクションを形成している。

2007年、金沢21世紀美術館の栗津潔作品1750点を一挙公開した「荒野のグラフィズム：栗津潔展」を皮切りに、2009年「複々製に進路をとれ 栗津潔60年の軌跡」（川崎市民ミュージアム）など、20世紀に築かれた栗津潔の偉業を新たに捉え直し、21世紀の意義を問う気運が高まっている。

栗津美穂（あわづ・みほ／AWAZU Miho）

1956年、東京都生まれ。シアトル（アメリカ）在住

1978年、渡米。カリフォルニア州立ポリテクニク大学卒業後、時事通信社ロサンゼルス支局記者、フリージャーナリストを経て、1990年代初めよりDV被害者の施設やユース・カウンセリング・プログラムの活動に参加。1995年、南カリフォルニア大学福祉学科で修士号取得後、精神保健局、少年院でインターンを経て、カリフォルニア州立精神科病院ソーシャルワーカーとなる。2000年よりベンチュラ郡・児童保護局。2006年からワシントン州の児童保護局にて0歳から18歳までの里子たちとともに仕事をして現在に至る。著書に『ディープ・ブルー：虐待を受けた子どもたちの成長と困難の記録』（太郎次郎社エディタス）がある。

＜参考資料＞

栗津美穂「豊かな国の貧困を生きる子どもたち」講演原稿冒頭部分

自分の仕事の話をする前に、父、栗津潔のこと、そして父と、金沢21世紀美術館とのつながりについて話したいと思います。

2004年の10月、ほんとうにたまたまなのですが、人に会う用事があった私は金沢に1日だけ、ひとり来ていました。金沢の街の中を歩き回っている時にこの金沢21世紀美術館の前を通りかかりました。美術館が開館する前日でした。その時は、この美術館が私の父の終着点となって、約3,000点の作品群がここに収められる、とは夢にも思いませんでした。

父は7週間前、4月28日に亡くなりました。80歳でした。彼の作品がこの“愛についての100の物語”展にも展示されています。父が亡くなったのは4月28日の午後2時過ぎ。その時ちょうど、この金沢21

世紀美術館で”愛についての100の物語“展の内覧会の準備をととのえているところでした。私の弟は、父の魂が川崎市の病院から金沢の美術館に飛んでいったら、と言いました。だから父は今日もここにいる、このプロジェクトに参加していることと思います。

父はグラフィックデザイナーとして、いわゆる宣伝ポスターを作ったり、本の装丁をするだけではなく、演劇・映画の美術、都市計画デザイン、壁画、彫刻、大阪万博の企画への参加など、ありとあらゆる分野で活躍することになるのですが、その栗津潔の子どものころのことを知っている人は、意外に少ないと思います。

父は美術学校にも行かずまったく独学で、デザインの世界を開拓して、のちに日本のグラフィックデザインの方向やコンセプトを変えて行った、めずらしい人だったのですが、子どもの頃から自由に絵を書いていたことがこの「不思議を目玉に入れて」という本に出てきます。これは父が自分の子どもの時代のことを、子どもにも読めるようなレベルで書いた唯一の本です。

父は東京の目黒に生まれ育ちました。父のお父さんは能登のお寺の家族から東京に出てきて、父が1歳のときに電車の事故で死にます。ですから父は今で言えばシングルマザーの家に育った、貧しい家の子どもでした。母親が新しい夫と地方に疎開して行ったので、私の父は彼の姉と二人きりで東京に残されて空襲の中で生き延びる様子がこの本の中に出てきますが、父の生命力がとても伝わってきます。父はとても好奇心の強い人だったのですが、彼の生命力の源は実はほかの何ものでもない“好奇心”だったこと、好奇心があったからこそ、何も無いところから物を考えて創造する力、生きる力につながっていったことがわかります。

この本の中に小学生だった父が、家の前の石歩道にロウセキで絵を書いていたこと、学校の図画の時間に、真っ暗闇の中を石炭を積んで走るトラックの絵を描いたことなどが書いてあります。そして、父が目黒の円融寺で大きなイチョウの木に出会うくだりが出てきます。「平安時代から続くお寺の境内に五百年ぐらいたったイチョウの老木の三本の内の一本はたいへん不思議でした」とあります。「幹のちょうど中心のところから、ケヤキの太い枝が出ているのです。イチョウの木の中程からケヤキの木が生えてしまったようで、さらにその少し上には桜の花が咲き、そして イチョウが芽を吹き、同時にケヤキの枝も芽を吹くのでした『いったいこれは何だ。たいへんだ』と僕はつぶやきました。」・・・とあります。私は一度こっそり、このお寺を訪ねました。そこにイチョウの木はありましたが、もうとても古くて、どこからどこまでが何の枝なのか、ケヤキや桜の芽の吹く枝が本当に生えていたのかも定かではありませんでした。でもその時、ふと思ったのです。これは、想像力のたくましい父の子どもの頃の想像、空想だったのかもしれないと。今では、この円融寺のイチョウの木の真相のことを父に聞くこともできなくなりましたが、この力強い好奇心がぐいぐいと彼の人生をひっぱってきたことは確実です。

私がこの父の子どもの時代の魂の強さを話したのには理由があります。私はアメリカで、ずっと虐待を受けた子どもたちの仕事をしてきましたが、今、いちばん考えていることが、子どもの『レジリエンス』ということです。レジリエンスとは科学の世界の言葉で、弾力、弾性、回復力という意味です。児童福祉やソーシャルワークの世界では、生き延びる力や性質、という意味で使っています。同じような状況において同じような虐待を受けた子どもたちが、高校でドロップアウトになって非行に染まっていく場合と、しっかり学校を卒業して社会に出て行く子もいる。何がその子の精神を支えて、救っていくのでしょうか。レジリエンスとはいったい何か、ということは実はあまり知られていなくて、その研究したいは、米国でも今、始まったばかりです。

今日は、アメリカの子どもたちの状況について話すなかで、このレジリエンスということを考えながら、すすめて行きたいと思います。

問い合わせ先

〒920-8509 金沢市広坂 1-2-1

金沢 21 世紀美術館 広報室

担当:落合

TEL : 076-220-2814 FAX : 076-220-2802

[http://www.kanazawa21.jp/
press@kanazawa21.jp](http://www.kanazawa21.jp/press@kanazawa21.jp)